

『宣言』における愛と自然

黄 錦 容

一、執筆背景について

有島が大正五年八月・十二月に妻と父を相次いで失ったことで、家庭の係累から解放されて、一つ作家として創作に専念でき、羽ばたいていけるようになったことが周知の通りのことである。大正四年（1915）妻の罹病のため札幌農科大学の教職を辞し、鎌倉その後東京に移した有島は妻の看護の傍ら、心密かに〈一転機〉を期待して、創作に励んだものである。作家として自覚的に創作活動を始めたのはこの大正四年、三十八歳のことである。その成果として『宣言』という書簡体の小説が生まれたわけであるが、処女作『かんかん虫』執筆の時期が明治三十九年とすると、足掛け十年の歳月が隔たったわけである。『宣言』制作期における有島の心境及びその身辺に纏わる状況は一体どういうものだったのか、まず執筆背景として取り上げたいものである。彼は同年六月十三日の吹田順助宛書簡では次のように訴えられている。

「白樺の七月号に何か書く事になつてゐて今半分書きましたが、かう心にも身にも余裕がなくなつては出来上るか否かが危ぶまれます。」

「安楽に始まった僕の生涯に一転機が来たやうにも思ひます。僕は恐ろしい、然し屈しない丈の気力を持った期待でそれを見つめてゐます。」（傍線筆者）
ここで言われる〈一転機〉はその翌年父武と妻安子の死によって始めて本当の意

味で訪れたわけであるが、自分の志す創作の道に専念する〈時機〉というものを期待していた有島の心境は既に二年前『或る女のグリンプス』の中絶後、弟生馬に宛てた（大正二年五月三十一日付）書簡には漏らされている。

〈私も運命を信じ居候。若し運命が私を必要とするならば私も何時か用ゐられるべき時機の来るのを信じ居候。〉

この期間、有島は内から湧き出る創作の衝動を抑えることはどうしてもできなかった。大正二年七月『白樺』誌上において『草の葉』（ホキットマンに関する考察）が発表され、次のように記している。

〈私は永い、真に永い間あるべからざる生活にこの身を任せてきた。私は自分を見凝める代わりに私の周囲ばかり見凝めてゐた。（略）私は大きな眼を開けて、外部の莊嚴と絢爛とに気を奪はれ、本当の私の主人なる魂が氣息も絶え――に私に呼びかけるその声を聞き落す所だつた。私はよくこそそこに気がついた。よくこそ魂の蟲の息に親切な耳を傾ける真純と本性とを失はないで済んだ。〉

有島の思想形成に精神の絶対的自由を説いたホイットマンの影響は改めて言うまでもないが、自分の本然とした〈魂〉がそのまま〈自分の力の限りあるを自覚——他人の誰よりも——しつとも尚進むべく余儀なくされて居る内部が僕にそれを命ずる〉（翌三年四月十一日足助宛の手紙）までになる。こうした〈内部〉からの要求が果たしてその実践される〈時機〉が次の大正三年にも空しく到来できず、不安と苛立ちの中で、『白樺』において書かれた作品は、『お末の死』『An Incident』『幻想』の僅かな三篇の短編である。そのいずれも下降志向をもち、自己否定の思想が潜んでいた暗黒の世界で焦慮していた彼の姿が窺われる。当時の有島の苦しみはいよいよ中編小説『宣言』の執筆に取り掛かる時期になると〈異様な意気込み、熱気を帯びた異様な戦慄〉（石丸晶子）^①をもって作

① 石丸晶子 『宣言』論——〈奇妙な日常〉と〈奇怪な姿〉への旅立ち——「作品論 有島武郎」安川定男・上杉省和編 双文社 昭和56、6、20

品の世界に入ってしまったのである。本腰になって創作に励む彼は、大正四年五月十一日平塚に入院中の妻安子に宛てた書簡で、次のように訴えている。

〈久し振りで仕事に対する力が湧いて来た。生まれ出る子が醜い事は知らないではない。然し、私にとっては是れ程うれしい努力は他に求められない。今日は心ゆくばかり筆をとりたいものと祈つて居る。病床にある君を真に慰め得るものは、僕の努力、甲斐ある事業だ、と云ふ事をよく僕は知つてゐる。今までも夫れを知つて、努力しないのではなかつた。唯、夫れが集中して一つの形を取らなかつた迄だ。結果が果たして努力に酬いるものであるかどうか、疑はしい。(以下略)〉

ここで言う〈仕事〉とは、取りも直さず〈内部の力〉を自覚しつつ長く待機していた彼が最初に作家としてその意欲を力強く披瀝し、〈集中して一つの形を取〉った作品——『宣言』の第一回分(大正四年七月『白樺』に掲載される)のことである。それにしても、後の半分は八月、九月の両号はやむなく休載となり、後には『白樺』の十、十一、十二月に連載された。休載になった事情について『白樺』八月号の後記に次のように告白されている。その時期に彼に纏わる外面的な悪条件は如何なるものか、推察される。

〈私の周囲には心的に可成り複雑し緊迫した色々の事件が生じて居る。夫れは日々その内容を十分に噛みしめて行く事を許さぬ程に四方から叢がり迫つて来る。私は又私の性格が漸くまとまつた形を取りつつあると云ふ大事な機縁に臨んで居ると云ふ事も恐る恐る体験する。無暗に筆を取りたい。同時に沈黙して居たい、そう云ふ矛盾した心境に居るのが今の私だ。〉

病床にある妻を抱えていながら、三人の子供の養育など、彼は外面的には〈緊迫した色々の事件が生じて居る〉し、内面的には自由人として歩み出したい、創作の上で何らかの形でまとめていきたい衝動と不安でひどく動揺していたものである。それが翌年の作品『首途』(長編『迷路』の序篇、大正五年二月)が発表される時期に吹田順助宛の書簡の中で次のように告白されている。

〈私の創作欲はかなり旺盛なのですが周囲の事情が其欲を圧抑して困ります。今も一つ手をつけて居るのですが、来月号の白樺に間に合ふや否やが疑問です。

いつまでも空虚な生活をつづける事が甚だ苦痛になります。私のやうにパンの問題に苦心を要せないものはもつと人生に対して真実であり、勤勉であらねばならぬと思ひながら、今日々々のおこたりの為に何にも仕でかさずに居る事は考へる毎に苦痛さへ与えます。全く何と云はれても返す言葉がありません、恥入ります。〉（大正五年七月十八日附）

有島の悲劇は、そういう理想と現実、霊と肉、生活と文学、社会ないしキリスト信仰における束縛と本能自然、ともいうべきものの間の深い溝を埋めようとして誠実に苦しみ抜いて、なおもその解決点を見いだせなかったところにあると思われる。とやかく、『宣言』の制作に当たっては〈やむにやまれぬ内的衝動にかられながら書きつづけていた〉（坂本浩）^②ことが事実である。そうした熱烈な思いを込めた彼の作家としての新しい門出は作品の世界ではどういう形のものとして結晶していくか、次から探っていきたい。

二、『宣言』の主題と主人公について

『宣言』の全編は篤い友情れ結ばれている生物学専攻の大学生 A と B との間に取り交わされた 37 通の往復書簡によって構成されている。A と B が一人の女性 Y 子を巡って織り成した恋愛・失恋の物語りである。A が登別温泉で Y 子を見初めたが、帰京の後 B が Y 子を知っていたため、その助けて Y 子に求婚し婚約をする。その直後、A は父をなくし、故郷の仙台へ帰って家計のため、小さな製粉所を経営するようになる。そして、親友の B に婚約者の Y 子の人間成長を

② 坂本浩 『「宣言」解説』 角川文庫 昭和 26、9

見守ってくれと頼んで、Y子の家に同居してもらった。一方、Aから執拗にその〈自覚〉を勧められていたY子が、いよいよ人間的な自我が目覚めてくるに従ってBに引き付けられて行く。Bも同じようにY子へ芽生えてくる愛に気づいて行く。Y子がAを裏切ってはならないと、愛の真実を避けようとしてBにAの妹N子と結婚させようとして、Bも一度その気になった。しかし、とうとうY子がそれがAとN子を欺瞞する行為になることと、自己の真実を偽るものであることに気づき、仙台に行って、Aにすべてを告白する。Aは極度の悲痛と深い孤独を噛み締めながらも、Y子をBに譲ろうとしてBからの宣言を待つ。Bは最後の手紙で堂々と宣言する。

〈裸なる真実、いつはらざる誠實を三人は知った。不倶戴天の敵であり、同時に情を等しうする殉教者たる三人は、誤たず躊はず各々の道を行かねばならぬ。……然し僕等の羸弱な健康は、恐らくは僕等を永く戦場に立たしめぬであらう。人生の事業は重く且つ遠い。君は悲しみを負ひながら、僕等の斃れる所に立ち上がらねばならぬ。〉

ざっと以上の粗筋になるが、従来の研究には作品に主題に関して様々な主人公説にめぐって論議されてきた。本多秋五氏は〈恋人の心がすぐれた友人の方へ移るのを男らしくたえるというテーマ〉を描いたものとし、Aを主人公と見た^③。一方、小坂晋氏はこの作品の主題を〈友情や婚約という「智的生活」を敢えて犠牲にして霊肉一致の恋愛である「本能生活」に生きるBとY子の姿を描くところ〉にして、〈有島の「本能生活論」を小説化する最も早い試みであり、いわば作者がキリスト教転向者として、創作生活（本能生活）に飛び込む宣言をなす作品であった〉と、BとY子主人公に有島を映っていた人物として評をした。^④ また、山田昭夫氏は〈真の「宣言」の実行者は実はY子なのではないか〉と、Y

③ 本多秋五 「日本リアリズム最後の作家——有島武郎の文学」『文学』 昭和28、2

④ 小坂晋 「『宣言』試論」『国語と国文学』 昭和43、11 後『有島武郎文学の心理的考察』所収（桜楓社、昭和54、9）

子を主人公にした。^⑤しかし、内田満氏は〈Aは「自分を責め鞭」ちながら、ついにルビコンを渡ることができないでいる実生活にあける作者自身の姿である。あつい友情の持ち主であり、誠実そのものといえる「智的生活」者——きのうまでの（そこで終止符をうちたい）みずからの姿である。ルビコンを渡ったのはY子であった。B——「本能生活」の懐へいままっしぐらに飛び込んで行く宣言者Y子は、きょうからの（そこからはじめたい）当為としての自己の姿ではなかったか。〉と、「A——過去の作者、Y子——当時の作者の自己認識、B——作者の憧れの未来像」として、それぞれの人物像に〈作家として出発しようとした彼みずからの宣言を重ねた〉ものである。^⑥なお、佐々木靖章氏は有島における過去のキリスト教体験を葬り去るものとして、〈Bの教会脱会が自らの青春否定に基づく行為であることは明らかになったが、……青春回復の待望者がBであるにもかかわらず、青春回復の実質的行為者はBではない。……結局Bにおけるパウロ批判はY子において性と霊の一元化として実践された。聖境をひらきつつあるY子の存在はBの代行者として〉見なしている。^⑦主題解釈に際して、石丸晶子氏はY子は〈その時、突然B様を恋するやうになった〉のは〈二人とも互いに「豪華華麗」というこの世の栄華が住まう生活社会と、そのなかで「非常に興味ありげに何か一つの事柄に熱中して居る」生活人たる「群集」とから、自分たちは放逐された疎外者であり、異邦人であるということを、確認し、了解し合って微笑んだのである〉と、BとY子との愛の成立に二人の同質性を讀んだ。^⑧その代わり、福本彰氏はAの〈恋のパスト〉としての〈在り様〉を強調

⑤ 山田昭夫 『有島武郎』 明治書院 昭和41、1 後『有島武郎・姿勢と軌跡』（右文書院、昭和48、9）にも収録されている。

⑥ 内田満 「有島武郎の創作方法——『宣言』から『迷路』へ——」 『同志社国文学10』 昭和50、2

⑦ 佐々木靖章 「『宣言』における青春回復への祈り——有島武郎とキリスト教の一面断」 『文芸研究』88集（日本文芸研究会発行） 昭和53、6

⑧ 石丸晶子 ①と同じ。

し、〈Aこそ作品「宣言」において、有島のロマネスクをにない、悲劇性を開示して行く存在なのである〉と、Aの「パスト」的性格がより力点において指摘された。^⑨なお、近年は中村三春氏は〈主題構成のレヴェルにおいて、A・B・Y子はそれぞれ肉欲を隠した偽善者、友情で自らの自由を縛った欺瞞家、「性と霊の一元化」を遂げる覚醒者の機能を担う〉と、覚醒者を従来のY子説を更に三人に及んで論じた。^⑩

以上の諸氏の指摘は主人公説にA・B・Y子のそれぞれにスポットをあて、三人の登場人物の性格・行動に即して作品の主題を把握しているが、そういう方向に沿って『宣言』の主題と構成、創作意図が推定されるのがほとんどである。そのいずれも安川定男氏の作品評価から域を脱していないものでもある。つまり、〈近代的個人主義の自覚を前提としてはじめて提起された運命的な恋愛と友情との葛藤の問題を〉とりあげて追求した作品であるとして、やがて『惜しみなく愛は奪う』の中で結晶されていく個人の自由を求めてやまない〈有島の根源的な思想がひらめいている〉という主題の提示そのものである。^⑪勿論、ここで私が『宣言』を読み、この作品の展開には諸先行論文の分析解釈にあるように、Y子が主な主人公となっており、一女性の「愛と自我」の覚醒・成長が主なモチーフとなっていることに異論をもつ気が毛頭ない。だが、私が同時に次のようにいくつかの疑問と感想を抱いたものである。

① A・B・Y子三者における愛の成立と崩壊は単なるそれぞれの性格の相違ないし同質性によるものか。Y子とBとの間に生まれた共感がAとは全く存在しなかったか。

② Y子の後の〈覚醒〉と最初にAから求められた〈自覚〉の内実とは全く

⑨ 福本彰 「有島武郎の『宣言』の悲劇性」 『日本文芸研究 22、1・2号』（関西学院大学） 昭和 45、4

⑩ 中村三春 「不透明の罪状 書簡体小説としての『宣言』」 『言葉の意志 有島武郎と芸術史的転回』所収 有精堂 平成 5、3

⑪ 安川定男 『有島武郎論』 明治書院 昭和 46、2

同様だったのか。

③ A・B・Y子にまつわる愛の本質への認識はどういう様相を呈するものか。

④結果においてY子が「本能生活」者Bの懷へ飛び込んでいき、Aが空しく孤独をこらえていくより術がなかったものの、一体BとY子だけが本能自然人となり得るものか、〈裸の真実〉を無残に告げられるAにはその後「智的生活者」のままで生きていくしかないのか、Aにも自然の自由人として脱皮していく可能性がどこに存在していたのか。

⑤結局Aにとっての〈真実〉と〈宣言〉が何だったのか。

以上の①②③の3点を合わせて『宣言』における愛の本質の有り様を論じ、その線上に④⑤の二点を考えて、愛の成就の条件として如にしてより自我が保たれ、純然たる自由自然が認め合えるか、ということについて考察を試みてみようと思う。最後にAの存在を悲劇人物として見なしていかどうかということを提起し、Aにとっての〈真実〉と〈宣言〉を明確な評価を与えたいものである。結びには作者有島と関連してA・B・Y子三者に託した有島の意図までとらえていきたいと思う。

三、愛の成立と愛の本質との相関関係について

これまでの諸研究は私なりに概ねにまとめてみると、BとY子との愛の成立には、要するに外的要素と内的要素、作家有島の投影との三つの要因が挙げられている。そでは次の通りのものである。

外的要素として、

① A・B・Y子三者の性格と人物特徴からたらしめたもの。

②愛の共感を呼ぶにはBとY子との間に持つ〈過去〉の共通体験というものの。

または、BとY子の同じ〈死〉の問題に直面していたこと。その二つが

大きく作用したこと。

内的要素として、

③ Y子自身の「性の目覚め」と深い自己認識による「心的成長」というものの。

④ 三者の愛の在り方に対する認識の相違によるということ。

作者有島との関連として

⑤ 霊（キリスト教信仰）と肉（性、本能生活）の問題に苦悩していた彼の求めた〈霊肉一致〉の境地が B と Y 子によって到達されているということ。

などが挙げられると思われる。以上の五点は同時にまた「Y子の覚醒」の内実にも当たるものだと考えていいと思う。本稿は以上の五点の諸説を検討する前に、まず作者有島自身が後年『予に対する公開状の答』（大正七年十年『新潮』所載）の中で、自作の登場人物について述べている〈思想〉という言葉を押さえておきたいと思う。

〈……然るに『迷路』『実験室』『宣言』等の人物は、その性質上思想的であらねばならぬはずです。あの主人公等の抱懐する思想が直ちに私の個性全体の思想であると取られては困ります。私は自分に攝取した人間たちの中から一人二人を引き抜いて紙の上に生かして見たまでです。思想的生活——そでは現代の人類生活の一特色と云はなければなりません。……今の教養ある人々の生活から思想的生活を引き去つたなら、その人の生活内容は完全に現はされたとは云はれません。……さう云ふ意味で私の思想内容の有る作物を読んでいたゞきたいと思ひます。つまり作物中の人物の持つ思想が現在の生活にどれ程緊迫切実な関係を有つてゐるかゐらないかゞ私としては第一の問題です。>（傍線筆者）

事実上、ここでいう〈緊迫切実〉な〈思想〉が作中人物 A・B・Y子をして理屈っぽいことをしきりに言わせているところから見ると納得がいくようなものである。しかも有島の作品によく見られる思想性・観念性の特徴が同じく A・B・Y子の

性格にも色濃く反映されている。次からまず、作者の分身になりかねない三者の作中の言葉を取り上げ、その思想や性格がひらめいている箇所をその愛の成立・破綻と結び付いて考察してみたいと思う。

岡崎真弓氏は Y 子よりも A と B の二人の性格に重点を置いて論じている。A の性格を〈直情・独善・無頓着・公明〉の四点に絞っていい、A は愛の主導権を握って、与えようとのみしていたから失敗したのである。そこで、〈Y 子に何もかも求めてやまぬ。そこには理想の投影があった。彼女の豊満な性格、その先々を案じる彼は、再三再四更生を促し、自らをも又責め鞭打って愛の至福を贖うに賢明である。……畢竟 A がこの恋愛で得たものはこれすべて観念的な所産であって、Y 子という生身の人間ではなかった〉と言う。さて、B の場合はその性分は〈徹底的なエゴイスト・自己に誠実な自由人・delicacy なるもの〉などが挙げられて、〈その delicacy なる大きな力が、不完全と矛盾を抱え込んだ未知数の彼女の charm を捕らえていく。(略) B は「かかる人からかえって慰藉を受けねばならぬ」自らを危惧しながらも受ける事によって Y 子の心を掴んだ〉と分析している。^⑫つまり、B は受け身的ばかりだったため、Y 子の心を掴んだという氏の見方である。私が調べたところでは、A の性格に見られる一途な激情と独善性が、信仰の面と恋愛観の面と、また性的態度の三つの面に大分けできると思われる。信仰面においては彼はポーロ賛美をしておきながら、一方では自分の「自覚」というものが信仰によって取り払われることをも恐れていたことが伺える。それは次のようなものである。

〈基督によつて甦つたポーロでなかったら、あんな雙刃の劔のやうな深刻な観察はできないだらうと思つた。一寸進めば一寸だけの罪が擴がり、一尺退けば一尺だけの悔が残るやうな恐しさに襲はれる。

僕は今まで相當の勇氣を持つた、どつちかといへば活動的な、精力の強い

⑫ 岡崎真弓 「有島武郎——『宣言』に関する一考察——」 『藤女子大学国文雑誌 15』昭和 49、5

男として自分を見てゐたんだが、今假りに信仰の生涯を迎へ入れるとすれば、
是までの自覚は跡形もなく根こそぎ取られてしまひさうで淋しいよ。淋し
ぎるよ。> <9、15 付の書簡>（傍線筆者）

ここでいう A の「自覚」は紛れも無く、人間としての「自我」そのものである。
それなら、A の Y 子に望んでいた同じ「自覚」と称するものは一体どんなもの
であろうか。

<君のお世話で彼女が自然の意志に叶つたやうに発達する事を僕は心から祈
つてゐる。>（1、12 付の書簡）（傍線筆者）

その後 Y 子の消息の来し方が不規則になり、つい A によこした手紙には次のよ
うにいいよいよ成就していく彼女の恐ろしい「性的自覚」の実態が告白される。

<私は、この頃、聖母の御心の苦しさ、おぼろげながら分かるやうな心地
が致します。この末どんなになつて行くので御座いませう。私の目の前は段々
暗くなるやうにも存じます。あなたですら、もう私の胸の中をほんたうに知
つて下さることは出来ないのではないかとすら存じまして、心細う御座います。
あなたはヨセフにも増した善良ななつかしい方。私は……あゝ私は、私はど
んなに恐ろしい自覚に眼ざめるのれ御座いませう。私ははつきりと眼を見開
かなければならないのでございますか。でもあなたはそれをしろと仰有いま
す。私はあなたをお疑ひ申しません。でも私はほんたうに怖う御座います。

>（2、5 付の書簡）

Y 子はここで自分を「聖母マリヤ」として、A をヨセフとして譬えているが、彼
女の深い暗示が秘められているように思われる。自分が夫となろうとする A を
これから「性的に」裏切っていく恐怖の心理が訴えられている。Y 子でも「自覚」
の必要性に疑問と不安を抱いていたものである。つまり、A の「自覚」への認識
が Y 子の場合にはそれは飛んだ方向まで発展してしまったということになる。
両者の「自覚」の内実は A の「自我」と Y 子の「性的目覚め」の意味的相違が
生まれるわけである。また、Y 子の強いられた「自覚」にも A の独善的な性格

も読み取れる。果たして、Aの恋愛観はもともとこの「肉」の誘惑の問題を通り越していることが次の箇所を読んでも分かる。

〈今日まで力を盡して神聖に保った僕の心と肉とを、全部彼女に与へる時、僕に飽和した彼女の全體を、僕の掌に掴む時、人類の喘ぎ求めてゐた幸福は、僕等二人の上に完に成就するだらう。〉（10、10 付の書簡）

〈一昨日までは肉の誘惑も、僕の靈性を向上する一つの糧に外ならなかつたんだ。〉（10、16 付の書簡）

それでは、Y子の信仰観と性的態度がどういう様相を帯びているものだろうか。それは「男の人を恐れる心理」と「神様を男のように恐れる心理」とが表裏一体となって、混同してしまったようなものである。

〈私は……殊に男の方に向つては、理屈も何もなく恐しくのみ思ひました。（略）何時か男の人現はれ出て、私をこの上もっと深い不幸につき落とすに違ひないと、ちゃんと心の中で極めて居ました。（略）神様の事を伺ひました時でも、私は心の中で、神様を男のやうに思ひまして、唯恐れに恐れしました。（Y子の手記）

〈その信仰は凡ての信条から解き放された、自由なものだが、信条の破棄は一層全能者に近づいた必然として行はれたので、束縛を厭つて行はれたものではない。だから、彼女の思想なり行為なりは、信条によつて排斥される事はあつても、全能者の嘉納し寛恕すべき種類のものだ。〉（Bの2、9 付の書簡）

棄教者のBにとっては全き聖境にあるY子の信仰観に強い憧憬を覚えたわけである。ここではYがローファたる自由人である聖者の典型となるし、同時にまた、〈飛躍する恐ろしい力の持ち主〉として造形される。そして、Bとの一月十五日のしみじみした語らいの後は〈突然B様を恋するやうになつた〉ため、彼女は今までの「信仰」と「性欲」へのしこりも一気に吹っ飛ばされて、人間の「自覚」が始めて到達されたものである。

〈B様のお話が身にしめばしむ程、私は紙をはがすやうに快く、自分の目醒めて行くのが判りました。B様をお知り申すやうになつてから、私の心に起る性慾も自然な感じが添つて後ろめたさを覚えなくなりました。私の信仰なども、戸板を裏がへすやうに變つてしまひました。世の中の嘘いつはりと、本當とが、はつきり眼にうつるやうになりました。〉（Y子の手記）（傍線筆者）

今まで恐れに恐れた「性欲」の問題が〈後ろめたさを覚えなくなる〉と信仰も変わってしまう。

それでは、Bの人物造形はどういうものになるのだろうか。小坂晋氏はBの存在性に最も傾いて力説する。Bに見られる〈原罪否定・人間中心・恋愛賛美思想・少女偏愛に近いY子賛美〉が指摘される一方、Bの〈酩酊の思想〉を〈ニヒルとデカダンス〉と見なし、有島の〈キリスト教コンプレックスから発し〉たもので、〈神に対する悪魔的な反逆〉とまで論を下す。^⑬私の考察したところでは、まず信仰観においては、BはAとは反対に「ポーロ批判」をおこなっている。〈ポーロの支離滅裂な言議を僕は何よりも厭ふ。「人によつて法を説く」と云ふのか。さらば「人によつて法を説く」偽りの豫言者を慎めよだ〉と、聖者よりも人間としてのポーロを糾弾する。（9、20付のBの書簡）そして、彼の脱教した理由として六カ条が挙げられ、中には特に「酔興」の一語に帰しているのが目立つ。

〈僕の信仰は、明白に云へば酔興だった。自己の性格の根柢に触れる事を畏れてゐた僕は、酔によつて、自己の空虚を忘れようとしてゐたのだ。僕の信仰は要するに返上すべき信仰だった。〉（1、10付の書簡）

こうした「破滅的衝動」の〈酩酊の思想〉をもったBは、なぜY子を恋するようになったのか、という疑問が提起される。石丸晶子氏はBとY子との愛の成立には、安川定男氏の〈BとY子とを結び付けた力を「運命的な親和力」とい

^⑬ 小坂晋 ^⑭と同じ。

う表現で説明している〉という説をさらにその〈親和力〉の内実を明らかにしたものであろう。石丸氏の解釈によると、AがY子へ情熱をもった〈パトスの存在〉から家長としての責任を負わされた〈生活者〉へ変わっていく事実が挙げられる。それから、Aの人物評にあたっては〈偏屈・偏狹・自閉性・自己満足・偽善・独善・delicacyの欠如〉を取り上げ、そこでAの〈他者との対話を欠いた自己完結的世界、他者の論理に向かって開かれた世界ではない自閉的世界〉が示されているものと言う。Y子はその「流離」の境遇からにして、〈この世の生活社会からの落ちこぼれ・はみ出し者・異邦人〉であることを直観しつつ、その結果、彼女の性質は〈不安定な思い〉をさせ、〈男性に対する恐怖心〉を抱かせることになる。なお、Bの覚醒には彼のY子と同じ性質のものとしての〈生活社会の中の異分子・正統信仰集団からの異端児〉というイメージ、作品の後半部におけるBの〈外界の規約〉を守り「実生活」に忙しい「群集」を「昂然」と「睥睨」しつつもなお、それを敢然と無視して「真の自由」を押し進めていくことのできぬBの半途な「覚悟」のありよう〉が指摘される。この点においては〈Y子の深い「覚醒」が、Bの煮えらない半途な「覚悟」を、彼女と同じレベルの「覚醒」へと、連れ出したのである〉という結論へ導いていく。^⑭

私はBとY子との愛の成立には一月十四日の運命的な語らいの箇所で、その秘密が解き明かされていると思う。

〈二人の話はいつまでも盡きるやうに思はれなかった。話題は始めから終わりまで、快活なものとは一つもなかったが、二人は悲哀を知る人が、互を慰藉する為に、微笑みかはす如く、微笑みかはした。〉（2、9付のBの書簡）

はつきりとここで二人の共感が生まれたものであるが、それは同じ〈はみ出し者〉としての〈過去〉を抱えたためであることは否めないが、私がここで二人の

^⑭ 石丸晶子 ①と同じ。

「お互いに感傷的な人間で、誠実な人間性」が読み取れるように思う。その時は自由人であらしめるために傷ついた者同士の憐れみの情が通い合って、また傷口を嘗めあって、癒されていったものであろう。それでも、果たしてBは涉々としてAに向かって堂々と宣言できなかったのである。そして、いよいよ真実を暴いて見せようという段となると、彼は相変わらず言葉を仄めかして、暗示めいたものばかりを説いた。

〈N子さんさへ承知してくれるなら僕は結婚したい。是では哀願ではない宣言だ。僕等の間に交はされる言葉は凡て宣言であらねばならぬ。宣言を取消す事が恥辱ではない。僕等は宣言をなし得ぬ事を恥辱とせねばならぬ。〉

(2、14付のBの書簡) (傍線筆者)

ここで、彼は密かに「宣言」できないでいる自分のことを恥じていることを暗に匂わせていることが伺える。問題は石丸晶子氏の指摘にあるBのこの〈煮え切らない態度〉だけがY子の悲壯の決意にある「自覚」を鮮明に浮き上がらせたものだろうか。AがY子の「自覚・覚醒」に働きかけるものはなかったのだろうか。

中村三春氏はAとBとの性格は〈極めて似通ったところがある〉と言う。Aの規範意識による〈一本気な性格〉と、Y子に〈あらゆる愛撫を彼女に与へたけれども、結婚の式によって普通導き入れられる関係を結ぶ事だけは避けた〉(1・5付のAの書簡)偽善的な性的態度が論じられている。その代わり、Bは〈外的規範を束縛と感じ、個性の自由な発露を求める性格〉で、〈生命力の解放を尊崇する〉人生観をもっていながら、Y子に〈自己の恋愛感情を次第に自覚して行くにもかかわらず、それを実行に移そうとしない〉人物である。従ってA・Bの「誠実と欺瞞」の両面性という中心課題において〈誠実の底に肉欲を隠していたAと、自由を標榜しながら否定していたはずの軀に囚われたBと、外面と内面との甚だしい徑庭という点で、結局互いに着しく相似形をなす人物である〉。いわゆるマイナス意味の「偽善者」としてのAとBの造形が指摘されたものであ

る。^⑮こうした意味で考えると、諸論の見方では、敢えて勇気を出して、「宣言」なし得る者はただ Y 子に帰結していくことが概ね妥当の見解であろう。ただ、同じ、〈裸なる真実〉にぶつかった彼らは「自覚・覚醒」の面において Y 子のほうが遥かに勇者の姿を見せたにもかかわらず、一体三人とも〈殉教者〉と言えるのだろうか、私は非常に疑問に思う。Y 子の告白のあと、B は A に一度切りの最後の「宣言」をする。しかも、それが Y 子と A の「宣言」の後のことである。

〈裸なる真実、いつはらざる誠實を三人は知った。不倶載天の敵であり、同時に情を等しうする殉教者たる三人は、誤たず躊躇はず各の道を行かねばならぬ。

君の敗北の上に祝福あれ。

Y 子の甦生の上に同情あれ。

僕の勝利の上に悲涙あれ。

……然し僕等の羸弱な健康は、恐らくは僕等を永く戦場に立たしめぬであらう。人生の事業は重く且つ遠い。君は悲しみを負ひながら、僕等の斃れる所に立ち上らねばならぬ。悲しき然し勇ましかるべき君の未来に對する僕等の尽きざる好意を受けてくれ給へ。

宣言は盡きた。剣を乗るべき時が来た。〉(2、21 付の B の書簡)。(傍線筆者)

結局病弱な Y 子と B との二人は恋の勝利を得たとしても最後には死が待ち伏せているが、A だけがそれから卻って勇ましく立ち上がっていくものと、おおよそ推測できる。私には〈生産者〉の A はそれに耐えられるだけの力を持ち合わせていると思う。この点から見ると A は悲劇のヒロインというよりも、むしろ恐ろしい自然の力の持ち主であると言いたい。「智的生活者」だった A が、その後も逞しく生きていくだろう。A の公明な性格にして最後まで〈真実〉に直面する

^⑮ 中村三春 ^⑩と同じ。

勇気を失わずにBよりも先に「宣言」できたことで、もう一つの意味で評価すれば、彼も真の自由自然人だったとは言えないのだろうか。先行研究にはほとんどBとY子の造形に有島の求めていた〈本能生活者〉の象徴と見なしているが、Aの方は「恋愛の崩壊」にかけ加えたそのマイナス意味の性格が批判される。しかも、そこに過去の有島自身の代表としてそれへの訣別という意味で、Aの方は過小評価されていると思われる。だが、私はAの偽りのない性質にはそれ以後の他の女性との「愛の成立」にはきっと好ましい方向へ運ばれていくことを信じたい。たとえ、それが作品制作に当たっての有島の自己の過去と訣別という打算が潜んでいたということで、それでいてAという人物に「愛の崩壊」以後の行方がどうであろうかと、その関心を寄せていないにしても、私は思うには、この作品には作者有島の不本意でありながら、Aという人物の逞しい「生の根源自然」が自ずからそこから開示してくれたように思われる。……

四、結びに——有島の追求した課題について

植栗彌氏はA・Bの性格の相違を〈「拘泥」する所が大きい〉Aに対して〈Bは融通無碍の人、たえず「変化」し「進行」するひとである〉と言う。^{①⑥}なお、氏の近年の『宣言』論には更にY子の愛にはAに対する〈神への志向の保持者〉から、いよいよBに〈神への志向を伴いつつも、「人」としての「恋愛」の心が前面に押し出されてくるのを確認し〉て傾いていったことが強調されている。^{①⑦}つまり、氏の説はY子の性欲問題が〈うしろめたさを覚えなくなる〉(Y子の

①⑥ 植栗彌 「『宣言』論——ベルグソンの『時間と自由』からの受容を追いながら——」『国文学論集』16号 昭和58、1 後『有島武郎研究——「或る女」まで——』所収(平成元年、3)

①⑦ 植栗彌 「有島文学の女性像とキリスト教——『宣言』『クラゝの出家』『或る女』『聖餐』に見る——」『有島武郎研究叢書第七集 有島武郎とキリスト教』有島武郎研究会編 右文書院 平成6、8

手記) ところまでくると〈性欲の生起する身でありながら、神を愛することを実らせてゆく〉従来の説にある「霊肉一致」の理想型の人物という見解である。ここまでのわたしの考察を一括して言わせると、正に Y 子の人物特徴に有島のそれからの求めようとする未来像の〈本能生活者〉が存在していたことが認められつつも、必ずしもその「誠実」さとか、「自覚・覚醒」の程あいにおいてが A と B をして引け目を覚えさせようという打算が存在していたとは思えない。神への指向性から見ても霊的存在の Y 子を引き去って見ると、A にはその〈自覚〉が失われるのを恐れつつも、神への賛美が惜しむことはなかった。B の場合も棄教者でありながら Y 子の聖者としての霊的な力に対して憧れつつ、引き付けられていくことで、AB 両者は〈過去〉と〈現在〉の有島の姿を反映している面が否定できないが、有島自身はその両者を無視しようとした姿勢が見られないものであると思う。こうした B と Y 子両者の「自由人」の〈本能生活者〉の〈思想・愛の在り方・信仰観〉が、やがて『惜しみなく愛は奪ふ』(大正六年六月)において一つの頂点を形づくる彼の思想がひらめいているものである。だから、諸研究にある B と Y 子の賛美肯定論はほぼ定着した形となっているにも拘わらず、私は結びとして A という「生活者」の最後まれ守り通した「愛と友情への誠実さと公明さ」には大いに評価したいものであるし、A のこうした性格も、作者有島がありとあらゆる「本能の力」で振るい落とそうとしても、なお、生涯を通してもがいてももがいてもとうとう捨て切れない本然の性質の一部となって生涯を閉じたもののようにも思われた。こういう意味で考えると、『宣言』という作品はやはり「生活者」と「自由人」との間を彷徨う有島の脱出口の試作の作品として見なしていいだろう。『カインの末裔』においては全く「社会生活」と交渉を持たずに、がむしゃらに無謀に振る舞う仁右衛門といった「自然人」の造形よりも、この作品には「社会」の幅合がより拡大されているものの、「社会人・生活者」としての A の造形が、私から見れば、つまり「社会人」へ脱皮しつつありながらも、なお「自然人」の様相を帯びた人物となってしまうように

思われる。ここで、BとY子が有島の憧れの理想型の人物として見なしているが、一方、またAという人物には、有島の動揺しつつある「自然か・社会か」という二者択一の苦悩の姿が鮮明に浮き彫りされている、典型的有島像のようにも思われた。

参考文献

- 1、石丸晶子 『宣言』論——〈奇妙な日常〉と〈奇怪な姿〉への旅立ち——
「作品論 有島武郎」安川定男・上杉省和編 双文社 昭和56、6、20
- 2、坂本浩 『「宣言」解説』 角川文庫 昭和26、9
- 3、本田秋五 「日本リアリズム最後の作家——有島武郎の文学」 『文学』
昭和28、2
- 4、小坂晋 「『宣言』試論」 『国語と国文学』 昭和43、11 後『有島武郎文学の心理的考察』所収（桜楓社、昭和54、9）
- 5、山田昭夫 『有島武郎』 明治書院 昭和41、1 後『有島武郎・姿勢と軌跡』（右文書院、昭和48、9）にも収録されている。
- 6、内田満 「有島武郎の創作方法——『宣言』から『迷路』へ——」 『同志社国文学10』 昭和50、2
- 7、佐々木靖章 「『宣言』における青春回復への祈り——有島武郎とキリスト教の一断面」 『文芸研究』88集（日本文芸研究会発行） 昭和53、6
- 8、石丸晶子 注(1)と同じ。
- 9、福本彰 「有島武郎の『宣言』の悲劇性」 『日本文芸研究22、1・2号』
（関西学院大学） 昭和45、4
- 10、中村三春 「不透明の罪状 書簡体小説としての『宣言』」 『言葉の意志 有島武郎と芸術史的転回』所収 有精堂 平成5、3
- 11、安川定男 『有島武郎論』 明治書院 昭和46、2

- 12、岡崎真弓 「有島武郎——『宣言』に関する一考察——」 『藤女子大学国
文雑誌 15』 昭和 49、5
- 13、植栗彌 「『宣言』論——ベルグソンの『時間と自由』からの受容を追いな
がら——」 『国文学論集』16号 昭和 58、1 後『有島武郎研究——「或
る女」まで——』所収（平成元年、3）
- 14、植栗彌 「有島文学の女性像とキリスト教——『宣言』『クラゝの出家』
『或る女』『聖餐』に見る——」 『有島武郎研究叢書第七集 有島武郎と
キリスト教』有島武郎研究会編 右文書院 平成 6、8